

第1489回（1月29日）

農地の出し手層の構造変化と農地管理・流動化

田 畑 保

1980年代後半に入って日本農業が縮小・後退傾向を深める中で、農地過剰と地価・地代の低下、農業の担い手、農地の引き受け手の弱体化・空洞化とそのもとでのとくに中山間地域を中心とした農地の荒廃化の進行等、農地をめぐる問題状況もかなり変化している。本報告は、こうした近年の農地管理・流動化をめぐる問題の特質を、とくに農地の出し手層の変化に焦点を当てながら検討しようとしたものである。

農地の出し手層の変化に関しては、後継者が他出した高齢者だけの世帯＝高齢農家の増加とその高齢農家の高齢化の果ての離農、他方での特に平場兼業深化地帯で多くみられるII兼農家の後継者の農業非従事傾向の拡大と世代交替を契機とする離農の増加、という形を中心としながら農地の出し手層は増加する傾向にある。それは、農業の担い手の弱体化、空洞化の進行と裏腹の関係にあるが、このような一方で農地の出し手層の増加と他方で農業の担い手、農地の引き受け手層の減少、弱体化によって、農地の権利移動や作業受委託をめぐる関係においても「受け手市場」的な地域がとくに西日本を中心として増加しつつある。

最近の農地をめぐる動向において注目しておく必要があるのは、1980年代半ば以降農地の潰廃は再び増加する傾向を見せており、とくに中山間地域の畑での潰廃、耕作放棄が目立って増加していることである。そしてこうした農地の潰廃、耕作放棄は農業の担い手、農地の引き受け手が弱体化した地域ほどより顕著となっている。

こうした状況のもとで農地管理・流動化をめぐる問題状況も変化してきている。農地流

動化の問題はこれまで専ら規模拡大の問題との関連で取り上げられてきたが、近年はもう一つの側面、農地の維持・保全の問題との関連で考えることが重要になってきている。農地の維持・保全のための流動化である。農地流動化・作業受委託の問題において、特にこうした側面が重要とならざるをえないところに日本農業をめぐる農地問題の現段階的特徴があるといえよう。

農地をめぐる問題状況のこうした変化にもなつて農地管理・流動化の課題も、かつてのような農地の出し手の「掘り起こし」活動を主体とした単なる流動化促進策から農地・農作業の受け手の「育成・確保」のための施策が重要な課題となつてきている。市町村の農地行政担当者に対して行なったアンケート調査結果によっても約60%の市町村が、農地管理・流動化施策の推進において最も重要な課題は農地の引き受け手の育成、確保にあるとしている。そのことはまた、農地管理・流動化の問題の検討において農地の維持・保全という側面を重視し、その視点から農地管理の体制のあり方を考えていく必要があることを示している。